



月 天 (胎蔵界曼荼羅)

日々好日

(令和八年二月発行)

本堂の外陣に歳徳神の軸を掲げ祭壇を設け、万徳院から例年たわわに赤い実をつけた南天と竹を供えてもらい、境内に咲く白玉椿や蠟梅などの供花。鏡餅に御神酒をはじめ蜜柑やリンゴなどをお供えして年神様を祀り参詣者とともに正月を寿ぎ、一年の安寧を祈ります。

三ヶ日が過ぎしばらくは静寂で清浄な空気のなかで過ごします。正月ならではのですが、十八日の初観音までにこの寺報の発行もあり、のんびりばかりもしておられません。

何をするにも時間がかかり、今年の干支のウマのように元気に跳ね回ることが出来ないので。それでも時間をかければ今のところ何事も遺漏なくこなせています。

この時間をかける中で様々なことが心中に去来し、胸を熱くしながら遅々とした自らの動作を楽しんでいるのです。み仏もそれを許容し愛念の眸で見守って下さっているように思っています。

これは世間が、世界中があわただしく変動する中でのこと、正に異世界の住人、老衲の年頭の生き様を察して頂くなら幸いである。

弘法大師のお言葉

「明鏡、瑩みかいて淨ければ妍蚩けんしの像これを現じ、清水澄み湛ううれば大山の相 これに影うる」



(秘蔵寶鑰卷第四)

※妍蚩…美醜

一見
阿字

五逆
消滅

真言
得果

即身
成佛

好日

釈尊の涅槃の日を前にして

戦争や天変地異、様々な事故などに遭遇することがなくともいつの日か必ず死をむかえます。若いから死と無縁であるとも言えません。

最新の医療を受けられる裕福な人も例外ではありません。ましてや高齢者は死を意識しないではおられません。著名人ならずとも私たち庶民の生涯もまた多少なりとも波乱の人生を生きてきています。振り返ってみれば怒涛のごとく押し寄せる荒波をかくぐって生き延びたという人も少なくはないでしょう。

その荒波を親が防波堤となつて生きながらえたという人もあります。社会に一步を踏み出して荒波をものうけて瀕死の痛手をのりこえたという人あることでしょう。

神は乗り越えられない壁はもたらさないと誰かが言っていました。その壁を乗り越えたもののその後力尽きた人もあります。まさにこの世はまぎれのない無常世界である。

老いてなお矍鑠たる人も多いことですが、死は免れません。心の準備だけはしておきたいものです。それが介護保険とか先進医療保険とかにはじまり、墓仕舞い、仏壇仕舞い。断捨離で終わってはなりません。

家財産の継承なども大事なことで避けては通れません。核家族の時代なればこそ、先祖代々のその家ならではの価値感というか、多様化している世俗に流されないその家ならではの大切なものの引継ぎを考えて欲しいのです。これこそが、遺産相続であつて欲しい。

人が之を危惧するのは愛する家族のことであり、残しておく資産のことだとされる。

その点、住職は気楽なものである。土地・建物は法人

(寺)の名義であり、わずかな個人名義の預金で気楽に余生を過ごせばよいのですから…。

このところ、この気楽な人生で過去の思い出にひたることに終始してきた感がありますが、過去形ではなく現在進行形の日々を心掛けたい。

それはやがて訪れる仏の世界への旅立ちの日に備えるものともなりましょう。

誰もが知っている「いろは歌」は弘法大師の作に擬せられてもいますが、高野山真言宗の宗歌でもあります。

色は匂えど散りぬるを

我が世誰れぞ常ならむ

有為の奥山今日越えて

浅き夢見し酔いもせず



これは「諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為楽」の四言絶句を詠んだものといわれています。すべての存在は無常である。これが生滅の法 生滅を滅しおわる生滅を繰り返すことが無くなった状態を寂滅と言い、楽と為すということです。

有為の奥山とは喜怒哀楽様々なことが流れ蠢いている世界なのです。そのような境界を有為の奥山と言つて、それを離れ超えると無為の世界に入ります。

そこには、生滅を繰り返すものもなく喜怒哀楽もありません、こうした意思のなくなった寂靜の世界となります。これがいうところの涅槃であり悟りの境界であり仏の浄土ということになります。

浅き夢もみることなく名声などに酔いしれずということの全くない世界です。

勝ち負けにこだわり損得に一喜一憂することもなく愛憎に苦しむこともない世界です。このような世界を無為

凶釈尊の侍者・阿難

仏は王舎城を見下ろす霊鷲山の山中に千二百五十人の
お弟子と共にありました。

その時、釈迦世尊は心中に「侍者をもちたい」と。

弟子の憍陳は仏の胸中を察して自ら名乗り出しましたが、
仏は、「汝は年、老邁なり。侍者とするに忍びず」と。

そこで魔訶迦葉、舍利弗、目連などが次々と名乗り出
るのですが、その誰も仏の意に非ざることを知るのでし
た。

そこで長老、阿那律は仏の意中の弟子は誰なのか思案
するに、阿難であることを知ったのでした。

長老らは揃って阿難の所に行つて言いました。

「阿難、世尊は汝を侍者として欲しいと思つておられる。早
く行つて仏の侍者たらんことを申し出よ。これは望んで
得られるものではない」と。

阿難は先輩の兄弟子らに言いました。

「世尊はその徳重く智慧深淵なり。私のような若輩が親
侍すれば罪を招き大きな殃を齎すであろうことを懼れま
す」と。

舍利弗はこれ聞いて言いました。

「今、世尊の意を拝察するに慈しみの心をもつて汝を侍
者として欲しておられる。それは太陽が東より出て宅
室の西の壁を照らすように、世尊の心は汝一筋である」
と。

阿難はこれ聞いて思惟し兄弟子たちに言いました。

「若し、世尊が私を侍者として望まれるのであれば、三
つの願いを聞き届けて下さるなら侍者となつてお仕えい
たしましょう」と。

阿難は続けて言いました。

「三願の一は世尊の衣を私に与えて着せしめることがな
いように配慮してほしい。

二の願は世尊の残食を私に喰らわしめることがないよ
うに配慮していただきたい。

三の願は時節の進現は私の思い通りにさせてほしいの
です」と。

舍利弗ら兄弟子たちはこれを聞いて、阿難の願うとこ
ろが理解できないのでした。

不審に思いつつも阿難の三つの願いを世尊にそのまま
告げました。

世尊はそれを聞かれて笑みて告げられました。

「阿難が我が衣を着ることを拒むのは、諸弟子が嫉妬心
を懐くことを畏れてのことなり。諸弟子は諸々の檀越か
ら高価な柔らかい衣を布施され、阿難はそれが欲しいが
ために侍者となつたのだと…。」

我が残食を喰らわざるは、如来の鉢には甘味百味あり。
これを食べたいが故に侍者となつたのだと…。」

また、時節の進現を裁量するということは、多くの外
道の衆来たりて時節を問わずそれぞれ勝手なことを述べ
て、それを仏である私が悩むようなことがあつてはいけ
ないと慮つてのことなり。だから阿難はこのような願を
たてたのであろう。」と。

そばでそれを聞いていた阿難は歓喜踊躍し長跪合掌し
て申しました。

「我、身命を尽きるまで
仏の侍者とならん」と。

この場に居たものは皆
、歓喜し頂戴奉行す。



あとがき

今年も新年早々に世界中を震撼させるようなことがおこりました。云うまでもなく南米ベネズエラに米軍が軍事介入し、大統領夫妻を拘束したことです。

国際法など無視しての傍若無人の振舞である。アメリカの安全のためには武力を行使しても西半球を支配しようとしているのだという。

トランプ大統領はデンマーク領のグリーンランドにも触手をのばし、キューバにも脅しをかけていますが、これに対して中露は非難の声をあげるも西洋の諸国はもとより我が国も非難らしい非難をしていません。

これではウクライナ侵攻のロシアのプーチン大統領を咎めることなどできません。世界病む。深刻な病である。速効のワクチンもなく名医もいないのでしょうか。これに関して高市総理の歯切れの良い言葉が聞かれないのは歯がゆい。

寒波の襲来で雪が舞う日もありますが、初観音・星祭・涅槃会などの年中行事を元氣につとめたい。これは住職の檀信徒の平穩無事をお祈りさせていただく行事でもあります。世界が病み、天災も繰り返される中でいい加減なご祈念は出来ません。それこそ老いの一徹での祈りを捧げたい。境内は椿や山茶花が咲いて冬の殺風景な境内を彩っています。

発行者

高野山真言宗

寶池山 龍

門 寺

吉 岡 光 昭

煩悩の

熱をも冷ます

月天子

鷲鳥に乗りたる

貴きみ姿

清涼の

光り遍き

月をれば

如来の慈悲に

喩え称うる



岩国市通津3634番地3 平740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611